

日本人の宗教心に關する意識調査「 坏 博康

平成廿八年（丙申）八月廿二日

本年の「文語の苑」の主題は「宗教」なり。是に因み、本稿にて現代日本人の宗教に關する國家機關による意識調査の現況を見んと欲す。

統計數理研究所（略稱「統數研」）、昭和廿八年より五年毎に國民性調査を實施す。同調査の中に「宗教」の項目あり、國民（集計對象）に對し「宗教を信ずや否や」、「宗教心は大切や否や」、「あの世を信ずるや否や」、「宗教、科學、何れを信ずや」、「新任首相の伊勢參りは是か否か」を問ふ。本稿にては紙幅の都合上「宗教を信ずや否や」及「宗教心は大切や否や」のみ取り上ぐ。先づ、「宗教を信ずや否や」に就きては、昭和三十三年の第二次調査より開始され、平成廿五年の第十三次調査迄の平均を見るに、「信ず」三十パーセントなり。即ち、大方の日本人は戦後一貫して「宗教を信ぜず」との結果を得、是は國聯を始めとする世界各種の統計資料が示す「日本人は世界で最も宗教に無關心なる民族」との結果に近きものと覺ゆ。他方、「宗教心は大切や否や」に就きては、昭和五十八年の第七次調査より開始され、同じく平均に於て見るに、「大切」七十一パーセントなり。更に、昭和三十三年（第二次調査）、平成廿年（第十二次調査）、平成廿五年（第十三次調査）に行はれたる「あの世を信ずるや否や」に就きては、昭和三十三年には「信ず」廿パーセント、「何れとも云ひ難し」十二パーセント、との結果出づるも、平成廿年に於ては、「信ず」三十八パーセント、「何れとも云ひ難し」廿三パーセント、との結果を得。同廿五年に至りては、「信ず」四十パーセント、「何れとも云ひ難し」十九パーセント、との結果出づ。即ち、現代の日本人は戦後初期に比べ「あの世を信ずる」の傾向強し。

以上を單線的に解釋せば、大方の日本人は「宗教を信ぜず」一方、「宗教心は大切」とすると共に、「あの世を信ず」者増加しつつあると見らる。更に、男女別で見ると、平成廿五年（第十三次調査）にては「宗教を信ずる」男性廿六パーセントに對し女性三十四パーセント、「あの世を信ず」男性三十パーセントに對し女性四十九パーセントなり。何れの項目に於ても男性に比べ女性の數値高し。

斯かる統數研の調査に於ては、「宗教」、「宗教心」、「あの世」等の主要の念の嚴密なる定義は與へられて居らず、故に表層的との批判は免れ難し。又、日本人の宗教意識に就きては、從來より宗教を個人よりも寧ろ祖先及家との結び附きに於て意識する等の特徴を指摘する説（山本七平）あるも、同説又は是に近き見解は全く考慮に無く、故に甚だ不十分との批判もあり得べし。然れども、約六十年に亙り現代日本人の宗教に關する意識を時系列に調査した結果なれば、如何に表層的と雖も、少なくとも参考とすべき點幾らか示したるは、統計學専門の國立教育研究機關として一定の役割を果たせりと思ふ。

尚、より詳細なる時系列結果、男女別、年代別結果に就きても、關心有る讀者は次の電網住所を訪問されし。

<http://www.ism.ac.jp/~taka/kokuminsei/index.html> (一)

（平成二十八年十月十四日受附）